
GTA主人公が幻想入り

Jason

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G T A 主人公が幻想入り

【Nコード】

N 5 2 2 5 Z

【作者名】

J a s o n

【あらすじ】

G T A L C S の主人公であるトニーシプリアーニが幻想入りし、数々の依頼をこなして、様々な事件に遭遇する物語です。
G T A なので残酷なシーンが含まれます。

初投稿なので言い回しや文の構成がおかしかったりします。

リバティーシティー アメリカ最悪の街。アメリカに住むならその名を知らない人はいないだろう。

全体的に治安が悪く、凶悪犯罪が多発しており政治腐敗に麻薬売買、労働組合のストライキ

そして何よりも移民の人種ごとによる犯罪組織の抗争が激しく、それらを踏まえ“全米で最も成功できない都市”に八回も受賞するという不名誉な記録を持つ都市である

またさらにリバティーシティ市警の、必要とあらば軍隊まで動員する過剰防衛の傾向や、悪徳警官の収賄などの不安定な内情もあり、市民の不安は留まるところを知らず、同都市は「Great place to leave（脱出するのに最適な場所）」などという不名誉な呼び名を与えられている

リバティーシティーの数多くあるマフィアのなかで最も有力である「レオーネファミリー」「シンダコファミリー」「フォレッツリアミリー」のうちレオーネファミリーに属し、下っ端の子飼いであるトニー・シプリアーニは、人生に一度や二度ぐらい「しかない不可解な出来事にひどく困惑していた。

さつきまで車窓から見えた建物が連なる景色から、深い木々が深く生い茂る景色に一変したのである。

公園・・・ではない。だとすれば一体・・・

G T A - 0 0 2

トニーシプリアーニ

フルネームはアントニオ？シプリアーニ

リバティーシティーでも有力なマフィア「レオーネファミリー」に所属している。

極度のマザコンであり、母親のいうことは何でもする。

また、ファミリーの為ならどんな犯罪でもためらわないでやるが、それさえ除けば一般常識はある様。

ある「大物」を殺して一旦リバティーシティーを離れていたが、ほとぼりが冷めて帰ってきた。

本作の設定ではまだ下っ端扱いのままのチンピラ

性格は気が短く暴力的である。

G T A - 0 0 2 (後書き)

ただの主人公説明です…

リバティースティーには三つの島がある。

「ポートランド」「ストートン島」「ショアサイド? ベイル」

そのうちの工場地区のポートランドのセントマークス付近で、レオーネの特徴的な車

レオーネセンチネルを走らせていた。

レッドライト地区を縄張りとしている、シンダコファミリーを一掃した後だった。レッドライトは今はシンダコのものとなりつつある。

シンダコは前まではレオーネの傘下にいたが、このごろになって激しく対立し、ここ数日には頻繁に銃声が鳴り響いている。

シンダコだけでなく中華街を拠点とするトライアド、ヒスパニック系ギャングのディアブロ、リバティースティーでも最も力のあるレオーネ、シンダコと並ぶフォレッツリファミリーにも警戒しなければならぬ。

いずれにしても、近い内に対立するだろう…

そう思えてきたら腹がすいてきた。

そういえば今日はママのレストランで食事だったな…

ならば車を飛ばさないと トニーはアクセスを踏みこんだ。

万が一遅れたらフライパンで殴られるかもしれない。トニーは苦笑いを浮かべた。

彼の母親がヒステリーを起こしたらのちのち後が大変である。

センチネルにはどこにいても敵対ギャングに対応できるよう、銃器や手榴弾、火炎瓶、バットまである。あらかじめいつも武器を携帯しなければ、後ろから刺されるか撃たれるか。いずれにしてもこの街では常識である。

レオーネのボス「サルバトーレ」宅近くで車を飛ばし、信号無視をしようとしたとき日本のことわざでよく言う「開いた口はふさがらない」状況に遭遇した。なんと10メートル先に妙な切れ目ができたのだ。

その切れ目がまた不思議で、空間を切り裂いてできてるようだ。明らかにここら一帯では見かけないものである。

その時まで得体の知れないものに気をとられて気がつかなかったが、辺りに鈍い銃声が響いていた。

トニーは辺りを見渡した。するとどうだろう。

焦げ茶色の服に身を包んでる奴ら シンダコの野郎と、レオーネが激しい銃撃戦を繰り広げていた。

シンダコが近くにいる…？

違いねえ あの得体の知れないものは爆弾だ。レオーネのボスを爆殺しようと爆弾を家の近くに置こうとした。だか移動中すぐに見つかってしまつて今に至るのだろう。

しかしあの爆弾はどう処理すればいいんだ？

銃撃戦はレオーネが劣勢である。すぐにカタがつくだろう。

「冗談じゃねえ」

処理の仕方がわからない今、俺はその得体の知れないものを車と一緒に突っ込んで処理するという、自らを巻き込んでボスの安全を確保するという荒業にかけた

そして爆発による衝撃に備え、ハンドルに頭を突きつけ、脳みそはママだけのことでパンクしそうな時、突如それは起こった。

車ごとその切れ目に入ってしまったのだ。

勿論、トニーはそんなことを知らず頭をハンドルに預けたままその不可思議な空間にセンチネルと共に、紫色の薄気味悪い奥深くに行ってしまった。

その次の日にそれらを一部始終見ていた一般人が、その全てをリバイター市警に話し、麻薬中毒者による幻覚と判断され、警棒でボコボコにされた挙げ句、署に引っ張られたのは言うまでもない、

G T A - 0 0 3 (後書き)

改めて見ていたが、文が酷い

まあそれは置いときご感想をお待ちします。

どんな批判でも結構です。

ただ、ここをこうした方がいいとか訂正を言ってくださったならなおさら嬉しいです…

八雲紫は落胆していた。あまりのショックに毎日自分の式を作る朝食に手をつけられなかったほどである。

主人の異変に気がついた八雲紫の式である八雲藍はこの重たい空気を破ろうと原因を聞いてみたが、はっきりとした答えが返って来ない。

ただ重苦しい雰囲気がある。その場を支配していた…

八雲紫には能力がある。「境界を操る程度の能力」

境界と名の付くものなら何でも支配下におけることができる。いわゆるよくいわれるチート能力である。

また彼女はその能力を使い、外の世界に行くこともしばしば。

事の発端はここから生まれたのである。

外の世界（人間達）はいつ見ても新鮮だ。

身体能力は到底妖怪に勝ち目はないが、彼らは驚くべき頭脳を持つ

ている。

そこから派生し、科学力が進歩、そして今に至る。

紫は外の世界のことはある程度把握している。

だから今度も自ら能力の使い、空間の境界を操り外の世界を鑑賞しようとした。

だが、彼女が“アメリカ最悪の街”にスキマが繋がるとは思っ
てみなかった…

リバティーシティーは「全米で最も成功できない都市」とい
われている。

また“最も盗難？強盗被害に遭遇しそうな”都市であり、“最
も環境汚染による病気で死亡しそうな”都市であり、“最もアル
コール？麻薬中毒になりそう”で、何よりも“マフィアの銃撃戦
の流れ弾に当たそう”な都市であると認識されている。

スキマからリバティーシティーを覗いた感想は“空気がかなり汚
れており”なによりも驚くべきことは、治安の悪さ

街中に響く銃声、それに逃げまとう人々、
交通事故、まさに生き地獄である。

しかしながら紫の目には失望感ではなく、だんだんこの街に対し
興味を持つようになった。

彼女が今まで見てきた外の世界は全て治安が良く、平和そのもの
だった。

それらと連動し、対比することによって、なおさら興味が湧いてきた。

車が通る道路に5？くらいのスキマを開けて、車が目の前にスレスレにくるスリル感を味わうという、子供が喜ぶような遊びをしていたことが間違だった。

遊びが全盛期をむかえた刹那起こった。

焦げ茶色の服を着た男達3名くらいが、紫の近くにいた全身黒づくめの男達にいきなり発砲したのだ。

その場は一変し、銃声が轟く銃撃戦に成り変わる。

さっきまで普通に歩いていた住民達は先を競って逃走し、中には車を乗り捨てて人間もいた。

「嫌な場所に出くわしちゃったわね」

独り言を呟きその場を逃れる為、早々とスキマを閉じようとした。

だか肝心の腕が動かない 拳がらない

おかしいと思いながら、自分の腕を見て驚愕してしまった。

おびただしい量の血が服を染み込み、細長い腕を伝い、足下に垂れていたのである。

気づいた時は腕に激痛が襲ってきた。 多分、今繰り広げられてる銃撃戦に巻き込まれ、流れ弾に当たったのだろう。

咄嗟の出来事だったので、頭がうまく回転しない。 でも傷の深さぐらい見ておくべきかしら？ スキマの中は暗くわかりにくい。 彼女は明るさを求め、スキマを大きく開けた。

瞬間の判断があるいは咄嗟の出来事に興奮してたのか、スキマを2メートルくらい大幅に広げてしまったのである。

彼女はあわてて縮小しようとした。

だが一台の車が物凄い勢いで此方に向かってくるではないか！
まるで此方に突っ込んでくるように。

結果、紫色の薄気味悪い空間に黒い車が入りこみ、紫の闇へと消えていった。

G T A - 0 0 4 (後書き)

表現力が
：

これは酷い作品になりそうだ

どうでもいい作者の好きなLCSキャラランキング

1位 トニーシプリアーニ

まあ、好きじゃなかったらこの作品は成立しない

2位 ドナルド？ラブ

え？変態だつて？ いや、キャラ濃くていいジャン

3位 ミッキー？ハムフィスツ

よく見るとイケメン

故意にやったわけではない。しかし、外来人の無駄な幻想入りは時には幻想郷の危機を意味したりする
：

周りの空間に目がついている。おかしい奴だと思われるかもしれないが、ギョロギョロした無数の目に見られると、今の自分の現状を理解しざるを得ない。

人が死ぬところなるのか。 トニーはママとボスのことで、頭も心も支配されていた。

薄気味悪い空間から一変し、辺りは木々が生い茂る南米のジャングルを連想させられる場所にでた。しかしスピードをだしていたので派手に突っ込み、しかも着地地点が岩が露出している足場の悪い場所だったので、お気に入りセンチネルが鈍い音を盛大にだした。

「ガッシャヤヤーン」

俺はフロントガラスに向かって盛大に頭を打ちつけられた。

ひとまず周りを見渡してみる。 歩行者の話し声さえ聞かれない。車のクラクション音やトニーには日常茶飯事の銃撃戦による銃声も聞こえない。 トニーは困惑した。

おいおい、リバティーシティーにこんなでけえ公園あったけ？
サルバトーレ宅は確かに少し森林ぽかったけどよ。

トニーは知らなかった。 100メートル先には外来人を主食とする妖怪がいたことを……

妖怪は興奮した。久しぶりの獲物の匂いを嗅げたただで口から涎が垂れそうだ。

弱小妖怪を食べるには攻撃されるリスクを伴う。

だが人間 特に外来人はリスクがない上に実に旨い。

実に柔らかく歯ごたえがあり、こちらの中では人気である。

そのためか匂いを辿って着いた先はもう先を越されて、骨だけというパターンが多い。

彼は待ちきれない興奮を抑え獲物にギリギリ近づいていった。

G T A - 0 0 5 (後書き)

短いなあ…

ご感想をお待ちします。アイディア提供でも構いません。基本的にゲームみたいな流れにしたいですね。

G T A - 0 0 6 (前書き)

駄文はしょうがない
せめて完結は目指そう

外の人間は弱虫である。これはここの妖怪達の常識である。普通妖怪は人間を食する。ときどき人里を襲うが後に、村で最も信頼される人物「上白沢慧音」に返り討ちにあうだけである。

また村人にも自衛団など弱小ながら、妖怪に対抗する組織があるので、同時に相手をするのは無理がある。

外人人はまた、ここの妖怪達にとって笑いの的である。少なくとも村人達の方が勇気があるといっても過言ではないだろう。

彼らは俺達妖怪を目の当たりにするとき、足が震えそのまま座り込み、弱々しい声や奇声をあげるのである。

逃げることもしなければ反抗さえしないのである。

そのような惨めな姿が人間は妖怪に及ばないことを強く思わせるのだった。

外人人は1ヶ月に一人ぐらいしか来ない。

つまりとても貴重な存在であり、また他の奴らに先を越されるわけにはいけないのである。ついさっき匂いで見つけた獲物を逃すわけにはいかない。また、あの恐怖の顔を見れると思うと、だんだんと疾風の如く獲物に向かっていった。

トニーは車から降り、ピストルを片手にポケットに手榴弾をいれ辺りを見回した。いつも外に出るときは武器を持つ。万が一に備える用心である。

当然、こんな場所は見覚えはない。もしかしたら、あの意味不明の空間の切れ目はサルバトーレがマリアにプレゼントした植物園の

入り口なのか？　そんなくだらんことを考えたりした。

しかし、空気が綺麗だ。

まるで別世界にいるようだ。

こんな場所じゃオオカミやら熊やら何がでもおかしくないな。
オオカミ？……

リバティーシティーのマフィア、ギャング達はいつどこで殺されるかわからない。

その為か第五感が鍛えられる。　背中に冷や汗が垂れたのと同時に、トニーは横に体を勢いよく投げた。

予想は当たり土煙をあげ、今までいた場所に全身黒色の赤目のデカイオオカミモドキが入れ替わるように着地した。

「おい、何なんだよ」　「冗談じゃない」

ここはリバティーシティーだろ？　あんなもんどっからみても怪物かそれとも生物兵器じゃねえか。こんなもんを放し飼いにするとはな…

いくら治安が悪くても、こんなバットジョークはないだろ。　警察は何してやがるんだ。

今まで見たことない未知な相手に脂汗が全身に吹き出す。　ちよつとばかりややこしいことになりそうだぜ……

外人だと思っておちよくってたら油断していた。あの野郎は避けやがった。一年前の奴と同じだ。今度ばかりは今までの獲物とは違うかもしれない。

まあいい 人間風情がどの程度俺様を楽しませてくれるのかな？

彼は驚愕する人間に再度飛びかかった。

G T A - 0 0 6 (後 書 き)

平日は更新が遅れます。

変な切れ目に突っ込むは未開の地にでるわ、オオカミモドキに襲われるし散々だ。

しかもどうもこいつは知能が高いらしく、

「ちえ」や「クソ野郎」等々人間の言語を喋るのだ。殺す気満々である。このままでは俺が屍になるのも時間の問題だ。殺すしかない。

m i s s i o n : 『妖怪を殺せ』

トニーはポケットから手榴弾をとりだす。一個しかない今有効に使わなくてはならない。あのオオカミ野郎は動きが早い。ならば動きを封じ込めばいい。じゃあ奴の気を引かなければ…

この外来人はこんな事は日常茶飯事かのように、俺様の攻撃を交わす。

俺はいつも通りにいかない狩りに腹が立ち遂に奴に真っ正面から突進した。

これはチャンス トニーはピンを抜き思いつき手榴弾を投げた。オオカミには当たらなかったものの、奴の後ろで、大きな轟音とともに爆発した。

奴は手榴弾自体を知らないせいか大音量に驚き、呆氣にとらえ後ろを振り返る。

俺はその無防備に晒しだされた背中に向かって、ピストルで何十発もの弾を打ち込んだ。

血飛沫が舞う。弾丸をまともに受け最初は立ち上がろうと必死にもがいていたか、もう一発頭にお見舞いしてやると無残にその場に倒れ込んだ。

俺様はパニクった。奴が投げた物が後ろに落ちたと思ったら、大きな轟音をあげ破裂した。あまりの出来事に奴に背中を晒しだしてしまった。

何発もの鈍い重低音が響き、鉛弾を食らい背中から血が吹き出す。

俺は何が何だかわからず倒れた。

mission completed!

改めてこいつを見てみる。明らかにオオカミではない。じゃあ何なんだ一体？

まず、人を探さないと…

『人里へ向かえ』

今日の報酬 100 \$

G T A - 0 0 7 (後 書 き)

戦闘描写は難しい…

G T A - 0 0 8 (前書き)

東方キャラの喋り口調がわからん

道が悪く車がガタガタ音をたてる。何がなんだかわからない。そもそもここはリバイティーシティーであるかどうかも怪しい。この気味悪い場所から早く抜けないと。

トニーは思いっきりアクセルを踏み込んだ。

木々が生い茂る薄暗い視界から畑と同時に農家なのだろうか？木でできたほったて小屋がポツリポツリと、少数ながら見えてきた。さらに車を飛ばすと人の姿を確認できた。

しかし、何とも妙。こいつらはホームレスより惨めで質素な格好をしている。

トニーは車をさらに加速させ、集落らしき場所へと向かっていった。

妖怪達は仲間の死体の周りに囲むようにして見下ろしていた。背中から首にかけて何かに貫通した跡がある。

「こいつは一年前のあのときと一緒だ。人間の仕業に違いねえ」

「人間風情が…村は皆殺しにしてやる」

「だけどうすんだ？ 上白沢慧音がいる限り俺達に勝ち目なんかねえぞ？」

「そこは心配ねえ ガキの一人や2人を人質にすればお手のもんさ。」

「ぎゃはははは それは名案だな」

「おい何だあれ」 「外人か？」

こいつらは車を知らないのか、こつちを指差して何やら喚いている。 おいおいとんだ田舎に来たみたいだぜ。

あまりにもやかましかったからクラクション音を盛大に鳴らした。
するとどうだろう

泣き叫ぶ者、気絶する者、大混乱に陥った。

俺は車から降り辺りを見回した。

まあ、随分とふざけた村だ。家はボロの一言に尽き、ビルは勿論電柱さえ見つからない。

俺はイラついた。

すると一人の若い女性が此方に向かってくる。はて、このまとめ役か？ならば話が早い。

「おい、ここはどこなんだ？ホームレスをこんなに集めて何やってんだ？」

すると満足した答えは返らず、代わりにふざけた返事が返ってきた。
「その言動を察するにどうやら外人だな。」

「外人？」

「つまり別世界だ。」

GTA - 008 (後書き)

他の小説に比べ文字数が極端に少ないので、最初から編集し直します。
なので次話は遅れます。

別世界だと…どうやらこいつらは真面目に答えないらしい。

「ここは幻想郷にある人里だ。外の世界と比べ少数規模だな」

「幻想郷って何なんだ」 仕方ねえ。ふざけたジョークに付き合っ
てやる。

「幻想郷とは博麗結界で外界と隔離している。外の人間から忘れら
れた妖怪達を中心に、少数の人間と一緒に共存しているところだな」
「つまり動物愛護団体やらがホームレス生活しているぐらいしか見
えないな」

「どうぶつあいごだんたい？はよくわからないが、信じてはいない
な」

「当たり前だ。おとぎ話にしか見えないぜ」

「ここにくる前に何かに出くわさなかったかな？今までにない経験
とか」

「大きなオオカミにはあつたな」

すると彼女は顔色を変えて焦った声をだした。

「妖怪に襲われた？怪我はないか？」

「こんなことは慣れている。心配はない。」

「もうじき夜になる。妖怪どもが活発に動く。人里なら比較的安全

だ。こちらに泊まっていきなさい。」

「親切は有り難く受け取るがリバティーシティーにはどう行けばいいのか教えてくれ。」

「だから…」

困った このままじゃ話が一向に進まん。何なんだよ幻想郷って

俺は呆れ空を見上げた。こうなったら何をほざこうが無視してやる。これ以上戯言を聞いていると耳が腐りそうだ。ことわざでいう「聞かぬが仏」である。

腹もすき欠伸をしようとした。何かが此方に向かってくる。また面倒ごとが増えそうだ。

空を飛んで来る…え？空

少女が空を浮いていたのである。

「慧音どうしたんだ？こんなに集まって」

…なんじゃありゃ 俺は目が飛び出るんじゃないかと思うくらい見開いていた。

「ちょうどいい時に来たな妹紅。 空を浮いているのが証拠だ。嫌でも理解するだろう」

少女説明中

「そうか大体のことはわかった。そういえば自己紹介がまだ済んでいなかったな。」

俺の名前はトニーシプリアーニ
トニーと呼んでくれ。」

「私は上白沢慧音だ。でこっちは藤原妹紅だ」

「これからよろしく」

「ああ、こちらこそ　そういえば寢床を貸してほしいんだか…」

「それなら無人の家が有るんだ。悪いがそこで寝泊まりしてくれ」

彼女　慧音から夕食を振る舞われた。純粹にうまかった。味噌汁や米を食べたのは初めだった。俺はひとまずお礼を言い家に向かった。

「うえ、なんだこれ」　ボロかった。あつちで住んでいたクソ溜めの方が輝いて見えるくらいだ。しかし親切は丁寧に受け取り家の中を見回した。

『隠れ家を手に入れた』

トニーはその晩ボロボロのベッドに身を委ね今後の事を考えていた。するとドアを叩く音がする。

こんな時間に誰が何の用だ？ 念の為片手にショットガンを持ち、ドアを開けた。

「今は何も聞かず中に入れてくれ」

いきなり見知らずの胡散臭いジジイが入ってきた。

G T A - 0 0 9 (後書き)

G T A L C Sのキャラは他に幻想入りした方がいいかな？
ご希望がありましたら感想の方へ

「なんだお前」

俺はいきなり侵入してきたジーサンにショットガンを向けた。
ここが幻想郷じゃなければ撃ち殺しているところである。

銃口が頭を狙う。

「家を間違えているぞ。それが物盗りか？
泥棒だったら容赦しねえぞ。」

「まてまて、落ち着け外来人。確かに勝手に入ったのは悪かった。
けどなこつちにも色々事情があるんだ。察してくれ。 な？」

俺は中身が飛び出たソファーに座り込んだ。　　じーさんが相対に
おかれた古ぼけたソファーに座り、ポケットから煙草を取り出し、
一服し始めた。

「何しにここに來たんだ？」

すると彼は煙草の煙を口から吐きだし、ゆっくりと口を開き始めた。

「一応忠告しとくぞ。村人にとって外来人とはな印象が悪いんだ。」

印象が悪い？確かに自分は人相は悪いがな…

まてよ…まさか

「幻想郷の成り立ちとして人間は妖怪に食われる存在だったな？」

彼は頷く。

「ならば話は早い。妖怪達はめったに人里を襲わない。そりゃあ外来人が代わりに食べられるからな。しかしそんな奴がこのやって来たらどうだ。腹を空かした妖怪共がここに襲わりかねない。そういうことか？」

「それも一理ある。」

嫌われることには慣れている。別段気にする必要はない。

「言いたいことはそれだけか？しかしあんたも村人だろ？どうして俺みたいな奴にそんなことを忠告するんだ？」

「一年前ある一人の外来人がやってきたんだ。全身を黒い服で包みこんだ奇妙な奴だった。そいつはリバイシティの何だっけな？レオーネなんとかの下っ端だったとか言っていたような気がする。」

「レオーネ…何だって？」

幻想郷に来てから驚きの連続だ。まさか俺以外のしかも同じファミリーの奴が幻想入りしてたとは…

「当時の俺は外来人に対し排他的だったんだ。当然のように冷たい目で見てやったよ。陰口なんか普通だったな…でもある日を境にしてそれが逆転した。」

あいつは生活の為に見たことのない植物を他の野菜と一緒に畑で

栽培していたんだ。

その頃の俺は野菜の芽なら何だって知ってたよ。でも奴が持ってたそれだけは見当すらつかなかった。

その晩俺は興味本位で家に忍び込み、植物の正体を探ろうとした。

奴は栽培した植物をもとに何かを飲んでた。

まあお前らがよく言うヤクってやつだ。

あいつが気持ちよく吸ってるのを見て、俺もやりたいと探求心が強くなったんだ。

スキを伺い少しばかり頂戴した。勿論悪いとは思ってもなかったな。外来人というレッテルを貼っていたからな。

家に帰り見たまんまあいつの真似をし、初めてヤクを吸ってみたんだ。

するとどうだろう　いままでに経験したことのない快感が体中に行き渡り、人生で最も幸福、今にも空を飛びそうな、もう口では表すことができない幸せにあったんだ。

そこからだった　俺は凄まじく変わり果てた。ヤクがなければ死にそうだ、もう一回あの何とも言えない幸福が味わいたい。

俺はあいつの家に向かい、今までの事を全て話した。盗んだことには腹を立てたらしく勢いよく蹴飛ばされ、思いつき殴られたが、自分もヤクの栽培を協力する約束で許してくれたんだ。

そのときは嬉しかったよ。毎日ヤクとの毎日だ。俺に幸福の女神が舞い降りたんだ。

村人との交流を拒否し、庭には野菜とともにヤクを混じって栽培し

た。

毎年号令の祭りも放棄し、あいつの家に毎日のように向かった。

村人は突然変貌しあいつと仲良くなる俺を差別と偏見の目で見ていた。

しかし外来人のあいつもあの手この手を使い帰っちまった。

お礼として作ってたヤク半分をあげてな。

どうもファミリーに必要な不可欠のものだったらしい。

「今の話でお前さんの過去はわかったが、それが俺に忠告するのとどんな関係があるんだ？」

「いや、村の嫌われ者同士仲良く協力しようじゃないか ん？」

「馬鹿は休み休み言え。俺は明日には帰るつもりだぞ。」

「今は博麗結界は不安定の時期だ。帰るように言っても帰して貰えないだろうな、無駄だ。諦めな。後お前のレオーネファミリーだっけな？結構ヤバイ組織なんだってな。何日間もお留守にしたら？何も言わないで消えた奴がお土産なしにノコノコやって来たらヤバいんじゃないか？」

げ…

「お前が帰る時は手伝ってやるし、ヤクもくれてやる。でもその間は俺の言う通りにしろ。わかったな。夜も遅くなってきたしそろそろ帰る。じゃあな 近い内に顔をだせよ。村人に見つかると思

倒だから夜に来い。」

『ヤク中のmissionがつけられるようになった
し夜しかつけられない』
しか

G T A - 0 1 0 (後書き)

感想があると小説を書く意欲が湧きます。
是非お願いします。

トニーは目が覚めた。いつもと違い濁った空気ではなく、澄んだ空気だ。 かけ離れた日常に戸惑いつつも窓を盛大に開ける。

視界の下には村人達がせわがしく働いているのが見える。

彼は顔を洗い、センチネルに運よくあった携帯食料を朝食代わりに食べた。 レオーネスーツを着こなして外に出た。

俺を見た村人は最初は物珍しそうに見ていたが、仕事が忙しいらしく、籠や農具を担いでサッサと行ってしまった。

俺も慧音に聞きたいことがあったので、足早に寺子屋に向かっていた。 朝なのか人が多い。 俺が通ろうとすると人波が二手に別れた。 囁き声が絶えない。 実に嫌な気分である。 トニーは元の世界が恋しく思えた。

今日は寺子屋があるので上白沢慧音は書類の整理に追われている。 いつもならはかどるこの作業も今日だけは手が進まなかった。 その原因として昨日来たばかりの外来人トニーシプリアーニが挙げられる。

トニーは一年前に来た外来人に何となく雰囲気似ている。 そのことが彼女を不安にするのに十分だった。 その外来人は何の連絡もなしに突然消えてしまったのである。

妖怪に食べられてしまったのか？ それとももうこの幻想郷にいないのか？

博麗の巫女にも詳しく聞いてみたりもしたが、彼女曰く「最近、元の世界に外来人を帰したことはない。」とのこと。

彼にとって幻想郷は散々だったのかもしれない。ここにくる前に妖怪に襲われ、運悪く左手の指2本を食いちぎられた。

それを踏まえてなのか、この幻想郷に住む妖怪いや、人里に住む村人まで軽蔑し、差別をしていた。よく村人とのいざこざがあり、殴り合いに発展したこともなかったわけではない。

あのととき彼に対して何も協力できなかった、いや、差別発言を連発されてた村人達を構い彼の事まで、頭が回らなかったのだ。彼女は盛大に溜め息をした。

そう考えてる間、ドアを叩く音が聞こえた。深く考えていたせいか、いきなりの訪問にびっくりして声が上ずっていた。

「だっ誰だ？」

「トニーだ。少し困ったことになった。力を貸してくれ。」

慧音は慌ててドアを開けた。

「すまない。実はここで生活していくことで、ある問題が避けられないんだ。」

「家は古いが結構丈夫なんだぞ。何年間も倒壊してない、生活するなら大丈夫だと思うんだか…」

「それはそれで色々ヤバいんだと思うんだが…そんなことはどうでもいい。問題は『服』だ。」

「ああそつえば一着しか持っていないのか。」

「そつだ。最初に来たとき着ていた服しかないんだ。…出来れば外の世界から流れ着いた服や物を売ってる場所はないか？」

村人が着てるあんなボロ雑巾をまとうのはプライドが許さねえ。クソ上司のヴィルチェンゾに見られたらお似合いだと腹を抱えて大笑いするに違いない。

「それなら人里の外れに香霖堂がある。外の世界の道具を扱っている場所だ。そこなら外から流れ着いた服ぐらい売ってるかもしれない。」

「わかった、行ってみる。」

『香霖堂へ向かえ』

G T A - 0 1 1 (後書き)

ミッションインボッシブルは面白い

俺はレオーネ・センチネルを取りに隠れ家のすぐ隣にある小屋に向かった。この小屋は見た目は古いが、ガレージとしての役割を持つには十分な大きさだ。

香霖堂までの道のりはわからないので、慧音が妹紅に案内役を頼んでくれた。人里の外れにあるらしく、歩きでいくのには結構きついらしい。無論、俺は空は飛べないから車で行く伝えておいた。

妹紅がくるまで俺はポケットから煙草を取り出し、車によりかかって一服する。あっちではゆつくりと吸えなかったせいかとても美味く感じる。

「へえ、この黒い塊みたいのが『くるま』ってやつなのか。」

声がしたと思い後ろを振り向くと、物騒な剣らしきものを担ぎながら妹紅が来た。できればその炎がゴアゴアいつてる剣をしまつてくれないか。

「そう、俺達外の世界の移動手段だ。まあ、飛んで移動するお前達にとっては不便に感じるだろうけどな。」

できれば空を飛びたいさ・

「さあ、せま苦しいと思うかもしれないが乗ってくれ。なるべく安全運転は心がける。」

「りょーかい」

「いや・・・そこに座ってもらうと運転ができない・・・」

信号機やら電柱やらサツがないおかげでスピードをバンバンとばせる。こちらにきてからはあっちの常識やらにとらわれなくていい。といってもあの街は常識自体通用しないが。

「こんな黒い塊がこんなに早く動くとは。外の世界ではこれが普通に普及してるのか？」

「車がなきゃ生きていけないぐらいだぜ。」

車は日常に不可欠だった。そのおかげで車泥棒がウヨウヨいて困ったが。

そついやまだ聞いてなかった。香霖堂の店主はどんな奴なんだろう。

「そついえば香霖堂ってどんな奴が経営しているんだ？」

「こーりんのことか」

「こーりん？」 あだ名か？

「ああ、本名は森近霖之助 妖怪と人間のハーフだよ。」

妖怪と人間のハーフだと・・もうこの世界に色々ツツコミをいれるのはやめよう。

「店主っていうよりも趣味で物を集めてるからね。コレクターといふべきかな。とにかく売り物として出されている物は少ないと思うよ。」

「つまりほしい物がある時は、自分の持つてる物と交換するしかない。」

「そうだね。」

困った、少々クセのある店主だったか。 だめだったら力ずくでも・

「ほら、あの奥にボツンとたっているのが香霖堂だよ。」 俺の考えが一旦中断し、妹紅が指を指した方向に目を向けた。人里から離れているだからだろうか？活気のある声や農地がないせいかな、何となく不気味だ。

目を凝らして見るとあっちで見慣れているものが山積みにおかれている。 どうやらここが香霖堂らしい。

俺は車を乱雑におき車から降りた。 周りは木や草に囲まれており少し寂しい場所であった。

「トニー何してるんだ？ 早く中に入るぞ」

「悪い悪い」

俺達は香霖堂に入っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5225z/>

GTA主人公が幻想入り

2011年12月26日23時01分発行